AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:151.

亜砒酸療法を受けた再発急性前骨髄球性白血病患者の体験と同病者から受けたサポート

黒崎明子 川井美紗子 須見隼登

亜砒酸療法を受けた再発急性前骨髄球性白血病患者の体験と同病者から受けたサポート

旭川医科大学病院
黒崎明子　川井美紗子　須見隼登

【はじめに】

今回、私達は同時期に急性前骨髄球性白血病の発症と治療を経て、さらに数年後に再発し、亜砒酸療法を受けた 2 名の患者に携わった。本研究は、亜砒酸療法を受けた患者の体験と同病者から受けたサポートを明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

対象者は 2 名。方法は、亜砒酸療法 2 コース後に半構成的面接を行った。分析は逐語録から患者の体験を説明する内容を含む言葉や文章をコード化し、その共通の意味を持つコードをカテゴリー化した。研究に対し倫理委員会の承認を得て、対象者には、研究参加の自由意思、プライバシーの保護や匿名性の確保等を文書で説明し、同意を得た。

【結果・考察】

面接内容を分析した結果、335 のコード、47 のサブカテゴリー、７つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、【1. 再発と直面し治療導入への思い】、【2. イメージの変化】、【3. 長い闘病と折り合いをつける】、【4. 副作用体験】、【5. 支え合う同志】、【6. 移植への不安】、【7. 家族や医療者との関係】が抽出された。

2 人の患者は、亜砒酸療法を開始した当初は猛毒である、毎日毒を盛られると効果に不安を抱いていた。次第に効果が得られると亜砒酸に対するイメージも変化した。治療の体験は、前治療の殺細胞性抗がん剤治療と比較した言動が多く、「持久戦」「長い治療」「自分のペースが作れる」と忍耐や情緒のコントロールも獲得していた。いずれの患者も亜砒酸療法は通過点であると認識していた。最終目標は造血幹細胞移植であると言い、移植への不安や移植の知識を求めていた。同病者から受けたサポートは、情報を交換し合い、同じ病気・経過を辿る同志という連帯意識や共感的な支えであった。